

【解説】

「職人」は社会の重石

新船海三郎

山本周五郎は江戸の職人たちを多く主人公にしているが、話は多分に人情ものに落とされている。「職人」の気質はよく描いても仕事の細部にわたっての描出ということでは、少し物足りなさがある。たとえば「職人もの」にあげられる、よく知られているところでは、経師師と大工を主人公にした「さぶ」や同じく大工の「ちいさこべ」も、男同士の友情であったり、孤児たちへのそれや若い男女間の愛情であったりする。

本書も例外ではない。中短編のなかから、大工、時計師、植木職、指物師、火鉢職人を主人公にしたものを集めたが、どっぷり人情に絡め取られている。とはいえ、彼らの暮らしぶりはもとより仕事にかける思い、さらに気質というものがうかがわれ、ときに、いまの私たちが捨ててしまった、手足からだを動かして一つことを仕上げる喜び、誇りを思い出させてくれる。

よく、江戸っ子は「宵越しの銭は持たねえ」といわれる。江戸職人の気っ風をよく言いあらわしていると思うが、この言葉は上方、とくに大阪人が金銭に執着するのにたいしていわれたもので、そこには、江戸の職人が幕府開設とともに屋敷や町割り整備などのために徳川のもの領地であった三河・遠江・駿河や伊豆、甲州などから江戸に呼び寄せられたという背景も関係している。京、伏見、大阪などからは名うての職人が呼ばれて各地から集まってきた職人や見習いたちを指導した。

都（政権）の所在や商業発展、人の集住から職人の量質とも上方が上回るのはやむを得ないことだったが、江戸っ子はそれでは収まらない。見返してやりたく、「宵越しの……」となるわけである。だが、貧乏暮らしと背中合わせのその気っ風も、本人はともかく、妻や子にしてみれば迷惑なことだった。余計なことだが、引き合いに出された大阪はたしかにケチだが渋ちんではない。必要な金には出すのがケチで、渋ちんは、金の話になると姿をくります、と大阪人は解説する。明解だが、渋ちんが京都方言であることをここでは気にとめておかないといけない。大阪人はただケチの解釈だけをしているのではないのである。

ともあれ、職人たちは、当初は新しく造成された神田・日本橋周辺の職種ごとの職人町（たとえば建築関係では大工町、木挽町、大鋸町、白壁町、畳町など）に住まいをもった。同業者どうしで組合などを作って仕事の配分や賃金の統一などを図るが、江戸の町が外へ外へと広がるにつれて住まいも散らばり、幕府の財政状況なども絡んで、同業種間の関係も取り決めも変遷していく。

江戸時代後期に作られた「諸職人大番付」を見ると、一四〇の職種が諸職と雛形に分けられ、諸職の大関に番匠大工、雛形のそれには刀鍛冶がランクされている。諸職と雛形の区分はよく分らないが、相撲番付をまねて作られたもので、相撲の東西をそのように言い換えたものと思われる。

諸職の関脇は壁塗左官で、番付の欄外に鳶の者が特別扱いにおかれている。この大工、左官、鳶職人は、江戸を支える「華の三職」といわれ、稼ぎもよかったという。年収が現在に換算して八〇〇万円くらい、日当が最上で二万五〇〇〇〜三万円ともいわれる。町民が日当三〇〇文、現在にして約五〇〇〇円くらいの時代である。

「立春なみた橋」に、改倭して仕事に励む新吉を描いたところがある。

「新吉はすっかり生れ更^かつた。

仕事は面白くなれば、もう占^{しめ}たもので、なにしろ後に橋田屋という大きな棟梁^{うしろ}が控えているし、腕は大工仲間で何人と指に折られるくらいだから、良い仕事だけ拾うようにしても手に入るほどの急がしさ、……正月も三ヶ日が明けるともう引張り^だり^だった。」

「立春なみた橋」を「職人もの」とするには主人公・新吉の仕事ぶりがほとんど描かれないのでいささか気が引けるが、まだ二〇代と思われる新吉が一日三匁、現在に換算して一万五千か二万円ほどになるのだろうか、ずいぶんな収入であることを知っておきたい。博打に手を出すのは、両親のいない鬱屈などにもよるだろうが、とりあえずは遊ぶ金に困っていないことが背景にある。

「母親」の慈しみを知った新吉が今後どうなるかは描かれなくても、いい棟梁になってほしいものと思う。

職人は、それひと筋だけに何となく自分一人（その仕事）が「崇高」なものと思ってしまう。時計師などという、江戸末期でも江戸に一〇〇人程度しかいないといわれる職人の場合、自分は特別という思いは強かったろう。が、鋳職から身を転じた三次郎の場合、掛け取りにきた米屋に、頭ごなしで払えないといったとたん、やんわりと返される。

「それから、都合のつくまでは米もお届け申しますよ、だがねえ親方、おまえさんが時計師ならあたしは米屋だ、時計作りは精根をけずるが米屋はちよろつかに出来るといふわけのものじゃない、職となればなに職だって骨が折れる、みんな精根をうちこんでやってるんだ。……どこにだって都合があるんだから、いま払えないものをもらおうとは云いません。世間は持ちつ持たれつなんだ、おまえさんのように自分ひとりが偉そうに、そうぼんぼん云うことはありませんぜ」

三次郎を決定的に打ちのめしたのは、南京人の短剣投げだった。畳大の板を背に両手を広げ大の字になった人間に、体に添うように短剣を投げる。間違えば傷つける。

「一人十文の見料で見せる見世物のたくさんの番組のなかの一つです。錢にすれば鏢びょうにもつかぬしがない芸です。そんな芸でもあれほど真剣な眼つきをやってるんだ、それなのにあたしはどうだ、いっぺんでもあんなひたむきな眼つきで仕事に向かったことがあるか。……親方、あたしはそう思ったとき眼がさめました。高の知れたやせ腕に己惚うろほれて、期限のある仕事はできね

えの、世間にやあ眼がねえのと、ひとりよがりの世迷い言をならべていましたが、いま考えると
ばかの骨頂、めくらの絵説きでございます、面目なくって身の置き場もございません」
そこに気づけば、三次郎の腕はまっすぐに作品に向かう。

だが、いのちを扱う場合はどうか。植木職だ。「おわりのない仮名」に植木職人の思いの丈
を述べるところがある。

「注文どおりの木を搜し、それを移して来て、うまく育てるのはちよろつかなこつちやあねえ、雨
風、雪霜の心配から、土替え根肥、枝そろえと、それこそ乳呑み児を育てるように、大事にかけ
て面倒をみるもんだ、しかもほかの仕事と違って、百日や二百日で埒のあくこつちやあねえ、木
によっても違うが、少なくとも三年、松なんぞは五年も十年も丹精して、どうやら形のつくも
んだ、そうして、こんなら手を放してもいいところまでこぎつけるころには、こつちの血が
その木にかよって、女房子よりも可愛い、しんそこからの愛情がうまれるもんだ、ほかの仕事だ
ってそうかもしれないが、こつちの相手は生きている木だ、幹も枝も葉も生きていて、こつちが
その気になればぐちを云ったり、笑ったり、叱りつけたりすることができる、木はにんげん同様、
生きているし話もできるんだ」

江戸で有数の腕を持つ源次がそのように職に誇りをかけ、精根尽くしても、木は思うがまま
にはならない。

「植えた木は或るところまでは思うように育つ、秀の立ちかたも枝の張りかたも、こつちの思惑

どおりに育つけれども、或るところまでくると手に負えなくなっちゃう、自分で引いて来て移し、大事にかけて育てた木が、みるみるうちに自分からはなれて、まるで縁のねえべつな木になっちゃうんだ」

源次が植木職を離れるのは、女房とのこともあろうが、もっと大きな、意のままにならない（無限とっていいかもしれない）木のいのちを見たからではないだろうか。知恵のかぎりを尽くして木を植える、その有限と、どこまでも生きようとする木のいのちの無限——この有限と無限は、物づくりと商売との綱引きよりも、ある意味でもっと強烈な、生死をかけたものかもしれない。「職人」とは、そこを命がけで生きざる者の称号というと言い過ぎだろうか。

しかし、それがひとりよがりになり、「にんげん同様」と言いながらその正真の「にんげん」への愛情の注ぎ方を知らなければ、人生の潤いがなくなる。源次は、「職人」のもう一つの姿を語っている。

「むかしも今も」の愚鈍なあとに弟子・直吉と鋭敏なおとうと弟子・清次という構図は「さぶ」に似ている。が、職人をひと筋に貫いたのは愚鈍とみられてきた直吉だ。博打との縁を切ると上方に出て三年目、親方の命日に帰ってきた清次に、直吉はいう。

「口はどうにでもきくことができる、おらあこのとおりぐずでのろまだから口じゃあどうにでもごまかされる、だが人間にはごまかしのきかねえものがあるんだ、駕舁^{かど}きと縫箔^{ぬいはく}屋とは足が違^{ちが}う、指物職人と遊び人とも違^{ちが}うところがある、どこが違^{ちが}う、どこがごまかせねえと思う、清次、……

手なんだ、ふだん鑿や鉋をいじってる職人と、まっとうでねえ事をしてぶらぶらしている人間たあ、手が違うんだ、——こいつだけあごまかせねえんだ、清次、おめえ自分の手をここへ出して、これが職人で稼いだ手だと云えるか、云えるなら云ってみて呉れ、それが職人の手か」

指物師は手がものをいう。九歳の暮れから住込み、ぐず、のろま、と罵られ嘲られ、金槌で叩かれながら、直吉は仕事を覚えた。道具の研ぎ方、鋸や鉋の使い方、渋や漆の塗り方、とくさ磨き、艶の出し方……一つひとつを体で覚え、手指に染みこませた。

指物師と博打うちとは、世間へ渡っていく覚悟も、生きていく性根もちがう。たかが「手」ではない。覚悟と性根の据わった「手」だ。

「ちゃん」が一九五八年の作だということは大事な何かを私たちに言わんとしている。

世は高度経済成長が本格軌道に乗り出し、三種の神器と呼ばれたテレビ（白黒）、洗濯機、冷蔵庫が売り出されてゆたかな消費生活が喧伝された。石炭から石油へのエネルギー革命はすぐそこに迫っていた。チキンラーメンと缶ビールは、食の大事な何かを奪うようで、儲けと効率第一が社会を席巻しだしていた。

そのときに、周五郎は火鉢の話として、重吉にこう言わせている。

「みんなが流行第一、売れるからいい、儲かるからいいで、まに合せみたような仕事ばかりして、それで世の中がまっとうにゆくと思いうか」

なるほど、周五郎の「職人もの」は人情物語である。しかし、人情はきちんと仕事をする者

のあいだにしか流れないものでもある。——かりにも職人なら、自分の腕いっぱい、誰にもまねることのできねえ、当人でなければできねえ仕事を——（しようと）しているから、周りのみんなが手を差しのばすのである。三歳の末娘お芳も廻らぬ舌で「たん、へんな」と、一人前に声をかけるのである。

「どう自分をだましても、どうにもそういう仕事ができねえんだ」という重吉のことばは軽くない。そのように仕事に向かっているか、そのように人生を歩いているか、腹の底を必死に叩いてくるのである。

いつの世だって、自分にしかない「筋」（思想ともいえる）を持って仕事をし、生き通すのは容易ではない。流行り廃りを腕や技能に見立てるのが世間だが、その世間で仕事はこなさなくてはならない。流れれば稼げるが、そこでは腕はもはや無用で、見栄えがよければ文句は出ない。「火鉢は火鉢」である。

それがいつもの時代であるとしても、では本物の火鉢は要らないのか。そうではないだろう。あぶくを対照するのはいつだって本物だ。「職人」とは、たとえて言えばその本物。あるいは、本物をかけがえないものと一念を貫いている存在だ。現代のように、利と力を求めてあさましく右往左往する社会と人間にあつては、殊に、まことに重い、重石といえるだろう。

（しんふねかいさぶろう・文芸評論家）